半導体漫遊記 175

湯之上隆

NANDを発明した舛岡氏 なぜ東芝を訴えたのか

NANDを発明した舛岡氏のNHKドキュメンタリー『プレイブ勇敢なる者「硬骨エンジニア」』を4回見直した。本稿では、なぜ舛岡氏が東芝を訴えたのかを考察する。そして、もしあなたが〝舛岡氏〟だったらどうするべきか、またはあなたの会社に〝舛岡氏〟がいたらどうしたら良いかを提言する。

舛岡氏は、最大の擁護者であったULSI研究所長の武石氏が1991年に享年63歳で急逝した後、1993年に「部下もなく予算もつかない〝技監〟」に昇進させられた。その結果、「東芝で僕がやることはなくなった」ため、1994年に東芝を退職し、東北大学教授に就任する。1994年とは、まさにNANDの量産が始まった年であった。

その舛岡氏は2004年、東芝を相手取って、「NANDの発明対価として10億円を要求する」裁判を提起した。かつての部下たちは、「舛岡さん、どうしちゃったの?」と首を傾げ、「裁判沙汰はやめて欲しかったですね」と疑義を呈する。

結果的に、2006年に、舛岡氏と東芝は和解し、「舛岡氏の東芝在職中の特許約50件の対価として、東芝が舛岡氏に8700万円を支払う」ことで決着する。筆者は、これは「舛岡氏の東芝に対する怨念裁判」であると考える。武石所長という後ろ盾を失った舛岡氏は、東芝からは〝お荷物〟とみなされ、研究できない〝技監〟に幽閉拉致監禁されてしまった。それが何より悔しかったのだろう。

番組中に舛岡氏は、「人生としてねー、研究したいよねー」と涙ぐみ、「東芝にいたかった。東芝にいて研究を続けたかった」と話す。そして、「お金の問題じゃない〝ありがとう〟。と言ってくれれば終わりなんだけどね」と言っている。この言葉が舛岡氏の本音であると思う。

舛岡氏はNANDを発明し、部下たちにNANDの開発をやらせ、試作と量産の成功に導いた。そのNANDは、東芝の基幹ビジネスに成長し、世界を一変させた。しかし、舛岡氏は〝ありがとう〟と言われる代わりに虐待を受けた。だから、その怨念が裁判になってしまったのだ。

筆者のコンサルの経験から言えば、第二の〝舛岡氏〟が存在する会社が少なからずある。そして、そのような人物は、その会社への貢献に見合うポストにもついていないし、報酬も得ていない。それどころか、〝出る杭〟として叩かれ、足を引っ張られ、冷や飯を食わされているケースが多い。

もしあなたが〝舛岡氏〟だったなら、直ちに、そんな会社を辞めて、相当対価を請求する裁判を起こすことをリコメンドする。あなたは、そんな会社に埋没して、一度限りの貴重な人生を無駄にしてはいけない。あなたが活躍できるステージは、世界中に無数にある。

もしあなたが会社の経営者なら、〝舛岡氏〟がどこかにいるのではないかということを、注意深く調査する必要がある。そして、〝舛岡氏〟を発見したら、直ちにポストや処遇などを改善しなくてはならない。その際、〝ありがとう〟ということを忘れてはならない。それを怠ると、その人財はあなたの会社を出ていき、あなたの会社を訴えることになる。逃げた魚は大きいうえに、牙をむくのである。

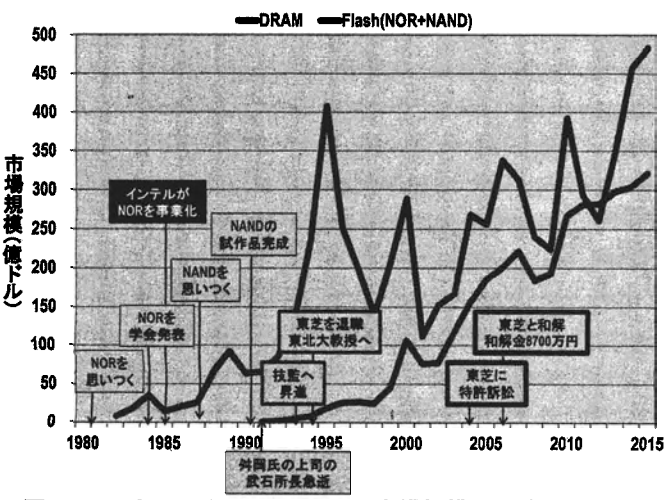

図1　DRAMとFlash(NOR+NAND)の市場規模および舛岡氏の動向

出所:電子ジャーナル『半導体データブック』などを元に筆者作成

(微細加工研究所・所長)